

ハンドボール競技における左利きバックコートプレイヤーの シュートプレーに関する一考察

～ボールをもらう前の動きからシュート達成までに着目して～

宮崎 翔平 (200712076、ハンドボール方法論)

指導教員：會田 宏、河村 レイ子

キーワード： ボール保持前の動き、ボール保持中の動き、シュート達成

【目的】

バックコートプレイヤーのシュートプレーの動きに関する研究では、左利きバックコートプレイヤーに着目した研究はない。左利きのプレイヤーは右利きに比べて少なく、独特のシュートフォームや動きでプレーしている。そこで本研究は、国際レベル、日本代表レベル、学生レベルの代表的な左利きバックコートプレイヤーを対象に、ボールをもらう前の動きからシュート達成までに着目して、シュートプレーの特徴・傾向を明らかにし、指導に有効な知見を得ることを目的とする。

【方法】

B・S (フランス代表)、Y・N (日本代表)、S・M (学生) の3選手を対象者とした。試合映像を見て、DFの位置、ボール保持前の動きの方向、体勢、DFとの関係、ボール保持中の動きの方向、ドリブルの有無、フェイントの有無、歩数、ステップパターン、シュートタイミング、フォワードスイング、DFの対応の12項目について調査した。得られたデータを選手のレベルごとに観察項目別に比較するとともに、シュート結果別に比較した。統計処理としてカイ2乗検定と残差分析を行った。

【結果と考察】

1. レベル別の比較

国際レベル、日本レベル、学生レベルの間に有意な差が認められた項目は、ドリブルの有無、歩数、ステップパターン、シュートタイミングの4つであった。ドリブルの有無は学生レベルのS・Mはドリブル有り、国際レベルのB・Sはドリブル無しの傾向が認められた。歩数は学生レベルのS・Mは1歩、日本代表レベルのY・Nは3歩の傾向が認められた。ステップパターンは学生レベルのS・Mはジャンプシュート、日本代表レベルのY・Nはランニング・スタンディングシュートの傾向が認められた(表1)。シュートタイミングは学生レベルのS・Mはセーブ、日本代表レベルのY・Nはクイック、国際レベルのB・Sはノーマルの傾向が認められた。一方、DFの位置、ボール保持前の動きの方向、体勢、DFとの関係、ボ

ール保持中の動きの方向、フェイントの有無、フォワードスイング、DFの対応については、国際レベル、日本レベル、学生レベルの間に有意な差は認められなかった。

2. シュート結果別の比較

ゴールイン、ノーゴール、ブロックの間に有意な差が認められた項目は、シュートタイミングだけだった(表2)。シュートタイミングはブロックされた時にセーブされる傾向が認められた。一方、その他の項目については、ゴールイン、ノーゴール、ブロックの間に有意な差は認められなかった。

【結論】

シュート達成までにドリブルは極力使わない方がよく、身長が高い選手は、1・2歩でDFのブロックの上からシュートを打つべきだが、身長があまり高くない選手は、歩数を多く使ってDFをずらし、DF間からシュートを打つことが有効である。シュートは、ランニング・ステップ・スタンディングシュートといった多くのシュートバリエーションを身につけ、クイックでシュートを打つべきである。

表1 レベル別のステップパターン

	学生	日本	世界
ジャンプシュート	69 (92%)	46 (62.1%)	30 (88.2%)
ステップシュート	3 (4%)	3 (4.1%)	2 (5.9%)
ランニングシュート	3 (4%)	9 (12.2%)	0 (0%)
スタンディングシュート	0 (0%)	16 (21.6%)	2 (5.9%)
合計	75 (100%)	74 (100%)	34 (100%)

カイ2乗=29.720, p<0.001

表2 シュート結果別のタイミング

	ゴール	ノーゴール	ブロック
クイック	74 (80.4%)	65 (80.2%)	8 (80%)
ノーマル	17 (18.5%)	12 (14.8%)	0 (0%)
セーブ	1 (1.1%)	4 (5%)	2 (20%)
合計	92 (100%)	81 (100%)	10 (100%)

カイ2乗=10.946, p<0.05